

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

第五福竜丸の乗組員服部竹治氏がこの一月亡くなられた。二十三人の乗組員のうちすでに十人が亡くなったことになる。その永い苦しみ、無念さを思い悲しみに耐えない。
まもなく被災43周年の三・一ビキニデーを迎えるが、昨年の「三・一ビキニデー集会」はその焼津アピールで、「ビキニ水爆 死の灰」の犠牲者みんなの無念の思いを胸にきざんで世界の核実験・核演習・核兵器開発の被害者と手を結んで被爆の実相と加害責任を明らかにしよう」とよびかけたのであった。私の所属する日本被団協も、ビキニ核実験被害者との連帯をうちだしたが、私たち静岡県でも、昨年二月に「ビキニ水爆被災事件調査・研究会」を発足させた。九月二十三日の久保山愛吉氏追悼のついで、ビキニ被災船の一つ、焼津の第八福一丸を追跡調査した状況、五人の乗組員が亡くなっていることを発表した。ビキニ被災の多くの漁船乗組員の放射能障害が拡がっているのではないかと思われ、広島で被爆した私にとって胸のいたむことで

私が生きているうちに核兵器をなくしたい

—世界の核実験被害者と手をむすびつ—

杉山 秀夫

あり、この運動を先頭にたつてすすみたいと念願している。
ふりかえってみれば、ビキニ被災十周年の記念すべき一九八四年三月一日、久保山愛吉さんの墓前祭をめぐって、久保山かずさんはさんさん苦しめられた。私たちは「静岡の心は統一の心」と誓い、このような状況を乗り越える運動を進め、一九八九年、静岡県原水爆被害者の会が先頭にたち、生協連、平和委員会、県評が中心となって、各界各層の代表を結集して、「三・一ビキニデー静岡県実行委員会」を結成し、今日にいたっている。
いまでは、この実行委員会のよびかけは、県下すべての自治体が支持賛同するところとなり、協賛金の拠出、広島・長崎市長への核兵器廃絶連帯のペナント贈呈が毎年行われるようになった。
またこの行動のなから、全県七十五議会に「被爆者援護法制定の意見書」「核兵器廃絶国際条約締結」の要請決議を採決させてきた。
実行委員会による平和行進も、私は

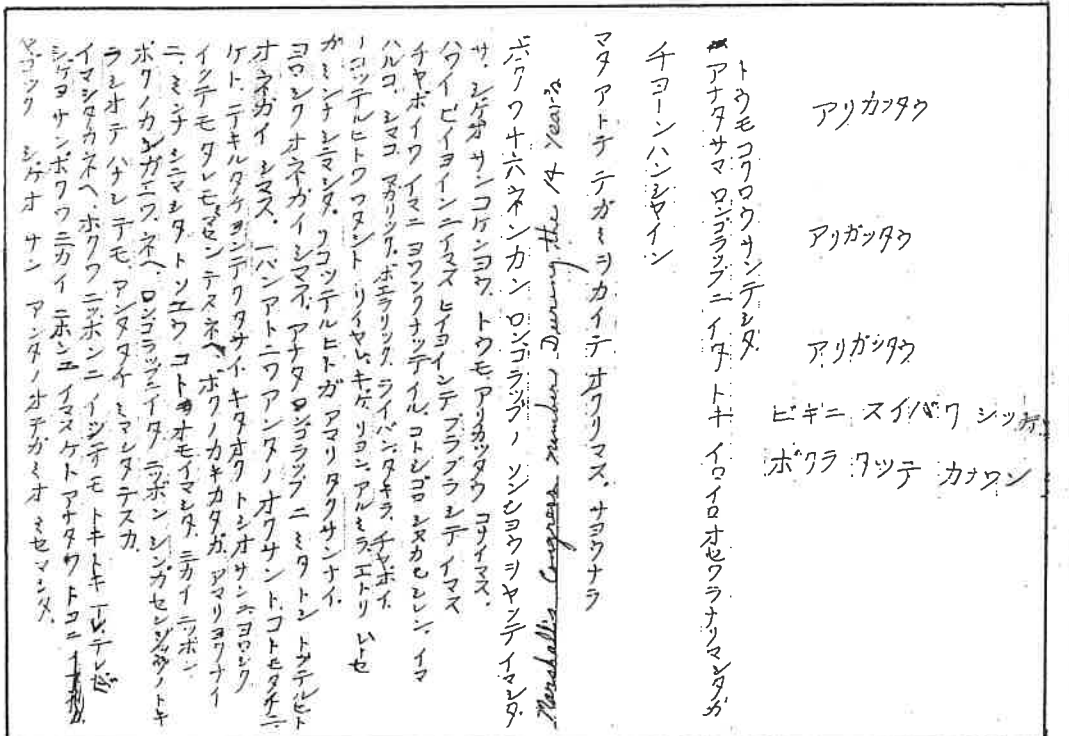
ほとんど毎日歩くが、私がたずさえた被爆体験画を見て汗で見送る老人、募金袋を用意して軒先に立っている人など、行進を暖かく迎えてくれるようになった。統一した積み重ねの力である。
昨年、国際司法裁判所は、核兵器の使用・威嚇は国際法違反という勧告的意見を国連へ提出し、それを受けて、国連を中心に核兵器廃絶のさまざまな動きがでてきた。
「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい」「ヒバクシャとその遺族が生きていくうちに一発残さず核兵器をなくして下さい」という久保山愛吉・すず夫妻の遺言を心として運動をひろげていく責任の重大さを痛感する。
「核兵器のない21世紀を」—被災43周年一九九七年の「三・一ビキニデー集会」は静岡県実行委員会と原水爆禁止世界大会実行委員会が共同して開催することになった。形だけでなく誰でも参加できるようにしたい。
集会で採択するアピールはそのまま、政府・国会へ要請できるように工夫が必要であろう。
「私が生きていくうちに核兵器を一発残さずなくしたい」。力をつくして花の季節を迎えたいと思う。
(静岡県原水爆被害者の会会長)



「ブラボーノコトハナシマス」
と米
添えかきのあったワシントン
議会議場前のジョンさん (1974年)

ジョン君のことを詳しく知り、何とか連絡をとりたいと思ってきました。
昨年、帰還した気象関係者の集まり「青空会」のメンバーから、ロンゲラップの島民に船を送る
「ジョン君のことはいつも心のどこかにあり、忘れることがありませんでした。一日も早く、美しい故郷ロンゲラップに、還ることができると祈るばかりです。(談)」

生まれたばかりの息子レゴジを宝物のように抱くジョンさん。1953年に生まれたレゴジは19歳で白血病で亡くなり、アメリカは「水爆実験被害者1号」とよんだ。手紙にはたくさんの写真が同封され、ジョンさんの苦難の活動を物語っていた。



カナで書かれたジョンさんの手紙(96年10月)の一部(左から右へ読む)。右端には「ビキニ水爆実験は非常に強い。ほくらだっかなわんだった」と書かれている。

核兵器と科学者

連載 26

ノーベル平和賞の栄誉と重責

—パグウォッシュ会議の成果と課題(5)—

小川 岩 雄

広島会議から三ヵ月後の一九九五年十月十三日、ノルウェーのノーベル委員会(NNC)は、九五年のノーベル平和賞をパグウォッシュ会議のジョセフ・ロートブラット会長と同会議自体に「等分して」授与することを決定したと発表、十二月十日にはノルウェーの首都オスロの市庁舎の大ホールで、国王夫妻臨席の下に、授賞式が厳粛かつ盛大に行われた。

授賞の理由としてNNCは「国際政治における核兵器の役割を軽減し、将来そのような兵器を廃絶するための多年の努力」を挙げている。発表文はとくに広島会議が「私たちは今やこれらの目標に迫る好機を得た」と宣言したことに触れ、今回の授賞が各国の指導者に対し、核廃絶を目指す一層の努力を促すことを期待している。筆者は幸い旧友の小沼通二教授(物理学者、現在パグウォッシュ

評議員)とともに式典に招かれ、その盛儀を終始見守ることができた。とくに冒頭に行われたノーベル委員会のF・セジェルステッド委員長を受賞者の功績を称える演説と、引き続き満堂の拍手は、私たちに与えられた至高の栄誉と多くの市民の熱烈な支持を深く胸に刻ませるとともに、私たちの社会的責任の重さを改めて痛感させることになった。

実際、パグウォッシュ会議は発足以来、折々の提言を通じて核軍縮の推進に少なからず貢献してきたものの、核兵器、さらには戦争と貧困の根絶という最終目標を達成するためには、無数の困難な課題を解決しなければならぬことを、私たちは絶えず思い知らされてきた。

最大の課題の一つは、各国内のパグウォッシュ・グループの層を厚くし、その日常的活動を強化することであろう。四十二年前、パ

グウォッシュ会議の開催を呼びかけたラッセル・アインシュタインの専門的知識と判断力に基づいて、核問題を公平かつ冷静に議論し、その結論を各国の政府や市民に示して、危機の回避や戦争の放棄を訴えることだった。

事例えば第一回会議では核兵器に明るい物理学者や、放射線の生物への影響に詳しい高名な遺伝学者などが多数参加し、権威ある声明を出すことができた。このような提言はその後たびたび行われ、核実験や生物・化学兵器の禁止条約の達成に役立っている。

しかし原爆開発に科学者の大動員が行われた米国などの戦後期はともかく、今日大多数の国々では「核兵器に明るい科学者」などは広い分野に渡る科学者のごく一部に過ぎず、やや関係の深い原子力技術者も大方は兵器への関心や知識は薄いようである。

また米ロなどの核兵器国では、直接・間接に核兵器関連の仕事に携わっている科学者や技術者は多いが、ほとんどが核戦力を支える立場にあり、守秘義務が厳しく、自由な発言もままならないため、パグウォッシュ・グループへの参

加や協力はなかなか難しい。

一方、実際に被爆を体験したわが国ではどの国よりも反核世論が強いが、科学者や技術者の多くは自らの専門分野に閉じこもるかまたは閉じ込められ、核兵器問題などに関心と時間を割こうとはしない。その結果、自らの専門が直接的な社会的問題と関わらない限り、彼らが社会的責任を自覚する機会が世代を問わず皆無に近い。

多くの科学者のこのような意識状況の下で、各国ともパグウォッシュ国内グループの活動や拡大は決して順調ではないようだ。わが国も例外ではなく、とくに湯川、朝永両博士らのような大指導者の没後、少数の後継者の献身的な奮闘にも係わらず、グループの持続的な活動や若手活動家の育成などは思うに任せない。

核兵器廃絶の国際世論が漸く強まり、懸案の核兵器禁止条約(NWC)の審議開始など、廃絶への具体的な前進が求められているいま、科学者に対しても特別の期待が高まっている。それだけに多くの科学者の自覚と反国内グループの強化が切に望まれる。(立教大学名誉教授・協会理事)

ロンゲラップからの五十五年ぶりの“音信”

小宮 茂雄 さんに聞く

昨年末、写真家の島田興生さんの紹介で小宮茂雄さん(左)が来館されました。小宮さんは、戦前一期、気象観測員としてロンゲラップに滞在していました。小宮さんにとって、ロンゲラップの思い出、特にジョン・アンジャインさん(元ロンゲラップ村長)のことは、忘れることが出来ませんでした。小宮さんが持参した封筒には五十五年ぶりの「音信」、ジョンさんからの手紙(四面掲載)がありました。

カナで書かれた文面、同封された写真。それらは、ジョンさんの苦難の五十五年を物語っていました。(聞き手・森小夜子)



展示館でジョン・アンジャインさんからの手紙や写真を前に語る小宮茂雄さん

私は旧制中学を卒業後、昭和十四年四月、当時の海軍水路部に入りました。三ヵ月の気象学講習の後、ロンゲラップに派遣されました。その年、南方方面に十何カ所の気象観測所が一挙に増設されたためです。気象を観測して船や飛行機の安全をはかるためですが、戦争の準備だったのでしよう。マーシャル諸島もウジェラン、ウジャエ、ロンゲラップ、ウォッチェなどの各島に六、七人が派遣されました。毎日六、七回観測して、無線でヤルト、パオを中継して、中央氣象台に送られました。私は翌年の十二月まで約一年半、ロンゲラップにいました。

当時ロンゲラップには、八十人位住んでいました。みな明るく、月夜の晩には踊り、魚もいっぱいいるし、エビやヤシガニも獲れる



10代の盛装したジョンさん(左) <日本の気象観測員撮影>

し、いつも泳げる。それは平和で、すばらしいところでした。

島でただ一人日本語が出来たのが、ヤルト公学校を卒業したジョン・アンジャインさんでした。仲間の一人がホーム・シックにかかり帰国したため、ジョン君が測夫として雇われました。食事、風呂、洗濯の世話役も頼みました。ジョン君と私は同じ年でした。休みの日には、カヌーで離島に連れていかれてくれました。一度伝馬船で魚釣りをしていて時沖に流され、ジョン君が泳いで助けにきてくれました。命の恩人です。

私は昭和十六年二月に、もっと東のウォッチェに異動になりました。気象状況がわかると、森林が伐採され、ウォッチェにも飛行場が作られました。その年の十二月に、戦争が始まりました。

私は翌年、徴兵検査で甲種合格になり、幹部候補生として満洲に行き、ハルビンで終戦を迎えました。戦後は、ソ連に抑留され、昭和三十一年帰国しました。そのため、「水爆実験」のことは知りませんでした。その後、『棄民の群島』、『グッドバイロンゲラップ』や新聞記事などで、ロンゲラップ、